

解答

□

- 問1 ハ 問2 ハ 問3 不発弾探し 問4 □ 問5 幼稚園からの友達
 問6 羨ましいと言う高井の意外な言葉に驚き、けげんに思っている。
 問7 どうせ 問8 ハ 問9 A ニ B ハ C ホ 問10 □ 問11 ハ

□

- 問1 ニ 問2 違わ〔ない〕 問3 われわ 問4 ハ 問5 ニ
 問6 非難されない 問7 A ニ B イ C □ 問8 □ 問9 □
 問10 イ 問11 A ホ B ニ

□

- 問1 言葉に表せ〔これ以上は〕 問2 ハ 問3 ハ 問4 □ 問5 また踏む。
 問6 イ 問7 ニ 問8 □ 問9 ハ 問10 ハ
 問11 (1) がいるじゅ (2) なまなま〔しい〕 問12 (3) 分身 (4) 入念

解説

□

出典は、森浩美『夏を拾いに』。

選択肢問題は、まぎらわしく判断に迷うものが多いが、このようなときは各選択肢に部分的にでもまちがったことが書かれていないか、本文の内容とくいちがう点はないかというようなことを検討し、消去法でしぼっていくと正答を選びやすい。

- 問1 「根岸くんに連絡した？」という高井くんの言葉は質問なので、アの「あてつけがましい忠告」は当てはまらない。また、種を吹き出すとすぐに「してない……こないし」とぶっきらぼうに答えているので、イの「わざと返事をあいまいにしようとしている」や、ニの「まごついてしまい……返事のしかたをまとめようとしている」は不適切。直後のぶっきらぼうな返事と合わせ、根岸くんとけんかのことを突然聞かれた不快感が感じられる。
- 問2 スイカの種を口から出したのは、次の「みんなで……」という言葉話すためであろうが、そのため「それをお盆の隅に丁寧に置」く必要はないので、アは不適切。また、口の「粗暴なふるまいを憎んで」いるかどうかはわからないし、ニの「友情を大切にできる」もこの動作とは関係のないことである。
- 問3 高井くんが「みんなで不発弾探しを再開しよう……」という言葉の続きとして話していることに着目する。
- 問4 「雄ちゃんに意地悪されていた高井くんが……なんて」という文脈に入る言葉であることに注意する。高井くんが雄ちゃんに意地悪されていたことと、みんなと一緒にの方が【 】とすることは矛盾することなのである。
- 問5 「だったら」は直前の「幼稚園のときからな」を受けている。幼稚園のときからどうだったのかを考える。
- 問6 直前の「はあ？」という「僕」の言葉に注意する。「羨ましいって思ったんだ」と言う高井くんの思いがけない言葉におどろき、どうしてそのようなことを言うのかけげんに思っているのである。
- 問8 高井くんが、それまでの自分の行動を「ポーズ」だと正直に告白し、「仲のいい友達がいない」「仲間外れにされるのが嫌だった」「君らが……羨ましくてさ」「ムカツとすることもあったし、バカだなあって思うこともあった」「一緒に……面白かった」「友達と遊ぶのって楽しい……嬉しかった」と、自分の欠点も相手を怒らせるかもしれないことも隠さず話していることから考える。
- 問9 A 高井くんに言われたことが気になって雄ちゃんちに向かったものの、まだ謝る気持ちにはなっていない。
 B 「僕は言葉が見つからず」とは、どう言ってもいいのかわからなかったということ。 C 雄ちゃんのかあちゃんが家から出てきたとき、「気づかないフリをして、スピードを落と」したのは、ホのように「向こうから……声を掛けてくれ」ることを期待したから。ロのように見つかることを心配していたなら、スピードをあげるはずである。
- 問10 「先制パンチ」はボクシングで、自分の方からパンチを打つつもりだったのにその前に相手からパンチを受けてしまうこと。ここでは、自分の方から謝る前に、いきなりおばちゃんから「ごめんね、ブンちゃん」と謝られてしまったこと。「まったく別の人から」といっているのは、けんかの当事者である根岸くんでない人から謝られたから。
- 問11 「何、ごちゃごちゃ言ってるんだい」は、「ごちゃごちゃ言ってるんじゃない」ということで、不平、文句、言い訳など言っていないで、今やらなければならない一番大切なことをさっさとやれ、という意味。「今やらなければならない一番大切なこと」は、けんかをしたブンちゃん(僕)と仲直りすること。

□

出典は、竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』。

- 問2 「違いない」は「～に決まっている」という意味の一語の形容詞で、「違う」という動詞に打消しの助動詞「な

い」が付いたものではないので、まちがえないこと。

問3 自分が「自由」であるためにはまず他人の自由を尊重しなければならない、という意味で、われわれの「自由」は、たがいに相手の自由を認め合うことによって守られる、というのと同じことである。

問4 次の段落で、「殺せばペナルティによって自由を剥奪される」といつていることに着目すること。「ペナルティ」は「罰」という意味。

問5 「殺せば……自由を剥奪される」というのだから、「自分の自由を確保するための条件」は、「殺さないこと」で、口は不適切。「殺さないこと」を「社会のルール」としての言い方で言えば、「殺すなかれ(殺してはいけない)」。

問6 「何をしても誰にも見つからず」とはつまり「誰もギョゲスのしたことを知らない」ということ。そのような場合には「彼は誰にも非難されない」と述べられている。

問8 直前の二文の内容、人を殺すことは「自分が『人間的』に生きるための自分の中の根拠を自ら投げ捨てること＝もう二度と自分はまっとうな、ちゃんとした人間だと、自分自身に言えなくなる」ことをさしている。

問9 「試しに……する」の意を表す補助動詞としての用法である。

問10 第四段落で述べられているように、「相手の自由の認め合い、相互承認の意志によって確保されている」のは、「自由」の「社会的側面」、つまり「社会のルール」であるので、イは「自分の中のルール」ではない。

問11 「これ」は、「道徳とか習慣(習俗)のルールといわれるもの」を指し、それは「社会の善悪のルール」の一つであるので、その「善悪」は自分でなく「社会」が決定する。

㊦ 出典は、『語りだすオブジェ』。

問1 「非常にがっかりした」ということ。

問2 自分が以前に落とした手袋かどうかは見ればすぐわかるので、イは不適切。また、筆者はAの歌を読むまで、「自分が落とした手袋の行方について、想像を巡らせたことはなかった」ので、ロも合わない。さらに「はっとする」は見たとたんに感じる気持ちなので、ニの「あれこれ想像を巡らすうちに……思い出してしまった」も不適當。

問3 落ちている手袋が人に踏まれないように、また落とし主が探しにきたときすぐに見つけられるように、手袋を拾って街路樹の枝に掛けておくような人を指す。落とした人の気持ちを思いやってそうするのである。

問4 ロについては、本文の表現とのちがいに気をつけること。本文には、「手袋が踏まれる度に自分の片手が痛みを感じているような、生々しい怖さがある」とある。「ような」を用いて表現していることからわかるように、踏まれる度に本当に痛みを感じるわけではなく、それは「生々しい怖さ」の比喩である。しかし、ロの選択肢は「ような」がないので、どこかに落とした手袋が自分には見えない所で誰かに踏まれる度に、自分の片手に生々しいこわさを感じる、という意味になり、それは実際にはありえないことである。

問5 問4とも関係するが、落とした手袋が絵の展覧会場で人に踏まれている光景は、作者には「見えない」が、それを思い浮かべ「……落ちている。……それを踏む。……また踏む。」と現在形で表現している。

問6 大きな雪片が降りかかるときには実際は音はしないけれども、「音絶えて」という表現をすることで読者に「音」のことを意識させ、水分を多く含む沫雪(＝重みがあるので降るときには音がするような感じのする雪)が「ほとほと降りかかる」ときの、実際にはしてない音＝聞こえない音が聞こえるような効果を得ているというのである。

問7 近くなら「用もなく」ぶらぶら出かけることが普通にあり、わざわざ「用もなく」と断ることもないが、だいぶ距離のあるところまで歩いていったので、わざわざ「用もなく」と断ったのである。

問8 「四句目」は「手袋も用も」で、八音になっているので字余り。短歌は、「五音・七音・五音・七音・七音」が定型。

問9 農作業用の手袋だと、使わなくなったので捨てただけの話だが、「手袋の送り主と仲違いでもして」捨てたものだとすると、なぜ仲違いしたのだろう、仲違いしたときは暗い気持ちだったろうが、春の訪れと共に作者の心は浮き浮きしているだろうな、今になっては捨てた手袋のことを気の毒に思っているのではないか、などと自由に想像できて楽しくなる、というのである。

問10 Cの短歌の後の「地面に落ちている……怖いような、美しいような、不思議なイメージだ。」という二文に着目すること。地面に捨てられた手袋が起き上がり、その指先に次々と花が咲き始める、などという情景は実際にはありえないもの。そのような作者の「幻想」をよんだ歌として筆者はとらえている。